インタビュー映像は、計４本で構成されています。
今回は４本目です。
インタビューアーは、日本財団ボランティアサポートセンタースタッフの山田。
お答えいただくのは、聴覚障害者の皆川さん（紺のシャツを着ており、髪を後ろに結んでいる 20 代の女性）です。皆川さんは、日本にいるとき看護師として働き、現在、アメリカのギャローデット大学に留学中。

この映像では、皆川さんから、オリンピック・パラリンピックで活動するボランティアへメッセージをいただいております。

画面情報
山田と手話通訳者が映る。
山田が日本語で話し、手話通訳者が日本手話へ通訳をしている。

それでは最後、オリンピック・パラリンピックでボランティアをする方にメッセージをお願いします。

皆川さんが手話で話す。皆川さんの手話は手話通訳が音声日本語へ通訳している。
ろう者、聴覚障害者にはいろんな人がいます。
盲ろう者や難聴者。口の形を読み取ることでコミュニケーションしている人など様々です。「聴覚障害者＝これ」と決め、くくることはできません。他の障害の場合も同じです。人はそれぞれで、障害に関わらず、同じサポートを受けても嬉しく思う人もいれば、嫌な気持ちになる人もいます。相手の希望や状況に合わせてコミュニケーションを取り、サポートしていく。でも自分がサポートするだけではなく、サポートしてもらうこともある。その助け合える関係がとても大切だと思います。

相手の希望を自分勝手に想像して決めつけずに、どうしてほしいか直接聞いてもいいと思うんです。その人が希望するコミュニケーション方法を聞き、それがもし難しければ他の方法を提案するなど、やり取りをしていく中で、お互いの、そしてその場の環境に応じたやりやすい良い方法を、その場で見つけていくことができるんじゃないかと思います。だから、自分が良いと思った方法ひとつだけでやり通そうとせず、状況に合わせて違う方法が使えるようなたくさんの引き出しを持って、これがダメならこっちはどう？なんて提案しながらお互いに話し合って進めていけると良いですね。
ボランティアは人を相手にするものなので、それが大切だと思います。

ボランティアの皆さんは、誰かの助けになりたいという積極的な気持ちを持っていると思

います。

でもサポートされる側は一方的に助けてもらうばかりだと、感謝の気持ちはあっても、自分にできることはないのかと寂しく感じることもあると思います。ですからボランティアの皆さんが完璧にやろうと思わずに、教えてほしい、助けてほしいと声掛けすることで、相手も自分にもできることがあると喜びを感じることができます。そんなお互いに助け合える関係性が大切です。

ボランティアというと助ける側だという意識があると思いますが、相手に頼り、助けてほしいと言える勇気を持ち、助け合える関係を築くことが本当に大切だと思います。

山田
皆川さん、本日はどうもありがとうございました。

皆川
ありがとうございました。

テレビ電話で繋がっている、皆川さんと山田が笑顔で手を振り合う。

ここで４本目のインタビュー映像が終わります。